

皮膚科のトリビア

254

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第124回日本皮膚科学会総会から

令和7年6月1日

ugly duckling signとは

アグリ・ダックリング・サイン(醜いアヒルの子サイン)は多くの色素性病変がある中で、色・大きさ・形・質感が周囲の病変とは異なる「違和感のある病変」を俯瞰的に見出し、メラノーマを早期発見するための有用なスクリーニングツールである。病理組織学的に確定したメラノーマ5カ所を含めた12例、計145カ所の背部の写真を用意し、ほかの母斑と違ってみえる病変(ugly duckling)があるかを専門医、一般皮膚科医、看護師、非臨床スタッフ間で評価した。5つのメラノーマはすべて“違ってみえる(ugly duckling)”として認識されたが、良性病変140個のうち、2個の母斑、1個の脂漏性角化症が“ugly duckling”と誤認された。感度は全体で0.90、専門医は1.00、一般皮膚科医は0.89、看護師では0.88、非臨床スタッフでも0.85で、ugly duckling signは、専門家以外にも比較的わかりやすい視点であることを示唆していた。

一言コメント

「白人高齢者で、背部に多数の色素性病変がある例をとくに経験する。患者自身がぱっと見て違和感を覚えることも重要で、それが皮膚科受診につながればよいと思う。」

●第124回日本皮膚科学会総会から

令和7年6月1日

Verocay bodyとVerocay body-like pattern

rippled pattern sebaceomaは高齢男性の頭部に好発する脂腺腫の亜型で、基底細胞様細胞が“波紋(ripple)状”に並ぶ特殊な組織パターンを示す良性皮膚腫瘍である。この“rippled pattern”は病理組織学的に神経鞘腫のVerocay bodyに似ているため、Verocay body-like patternとも称される。両者の鑑別として、Verocay bodyはSchwann細胞由来で、S100陽性、rippled pattern sebaceomaは脂腺系細胞由来で、S100陰性、adipophilin陽性である。

一言コメント

「経験したことがあるか、記憶にないが、通常のsebaceomaが中高年女性の顔面に多いのと対照的に、rippled pattern sebaceomaが高齢男性の頭頂部に多いことは覚えておこう。」

●第124回日本皮膚科学会総会から

令和7年6月1日

カフェオレ斑、なぜ6個以上でNF1を疑うのか

NF1の診断基準として、カフェオレ斑が6個以上あるとNF1である確率が非常に高い。

日本の『神経線維腫症1型(レックリングハウゼン病)診療ガイドライン 2018』では、「カフェオレ斑

を6個以上認めた場合、その95%は後にNF1と診断される」と明記されている。NF1の国際診断基準(NIH基準)でも同様である。

思春期前 5 mm以上／思春期後 15 mm以上のカフェオレ斑が6個以上、が主要診断項目の1つを担っており、全世界的に統一された基準である。1～2個では多くは正常範囲、3～5個ではNF1の可能性はあるが特異度が低い。カフェオレ斑はメラノサイトのセカンドヒットによって生じると考えられていて、6個のカフェオレ斑は6個のセカンドヒットを示している。

一言コメント

「なぜ6個で線が引かれるのか、考えたことはなかったが、全世界的な多数の知見から導かれた結論だと理解した。」

●第124回日本皮膚科学会総会から

令和7年6月1日

Becker母斑と乳房低形成

広範なBecker母斑に加えて、さまざまな組織の発育異常を伴う疾患をBecker母斑症候群(Becker nevus syndrome : BCS)と呼ぶ。BCSはBecker母斑と同側の皮膚、付属器、乳腺、大胸筋の発育不全を伴うことが特徴的で、さらに脊柱側弯症、漏斗胸、四肢の非対称などの骨格系の異常や発達遅滞、知的障害などを併発することがある。ACTB(β アクチン)の体細胞後天的ミスセンス変異が検出されることが報告されている。

一言コメント

「片側性の乳房低形成は非常に特徴的で、いかにもモザイク変異という印象だった。こういった症例に遭遇したときの流れを整理しておく必要があると以前から考えている。」

●第124回日本皮膚科学会総会から

令和7年6月2日

医療における総合的質管理とは

総合的質管理(total quality management :

TQM)は、組織全体で質を継続的に改善するための経営マネジメント体系であり、医療においては質向上、安全管理、業務標準化の基盤となる考え方である。医療の質向上は、診療プロセスの標準化と科学的手法やエビデンスに基づく対応が求められる。医療安全は、インシデント分析と再発防止策の体系化が重要。業務の標準化は、全員参加によって、組織横断的な継続的改善(continuous quality improvement : CQI)を定着させることが重要である。

一言コメント

「登場する用語が文系向きでややむずかしかったが、医療に携わる者、とくに院長や管理職にとっては重要な視点だと思った。」

●第73回神奈川医真菌研究会から

令和7年6月7日

*Candida auris*のアウトブレイク

カンジダ・アウリス(*Candida auris*)は2005年に耳垢から分離され、2009年に新種と記載された、日本から初めて報告されたカンジダ属の真菌。日本で最初に発見された日本国内株(clade II)は、主に慢性中耳炎の耳漏などから検出され、重症化しにくい「非侵襲性」の特徴をもっているが、米国、欧州、南米、南アフリカ、インドなどで流行している海外株(clade I, III, IVなど)は、重篤な血流感染をおこしやすく、多剤耐性も強力で致死率は30%に及ぶ。現在、医療現場ではこの「海外株」の国内流入がもっとも警戒されている。院内環境中では2週間、ヒトの腋窩、鼠径などに寄生したものは4週間以上の長期生存が可能とされている。

一言コメント

「そのようなアウトブレイク事象があったことを知らなかった。一般的な生化学的検査や顕微鏡検査では、ほかのカンジダ属と見分けがつきにくく、見逃されるリスクがあり、診断確定には、質量分析法や塩基配列を調べる遺伝子検査が必要らしい。」